

# 週刊センターニュース

No.191



第191号(2008年1月21日)毎週月曜日発行  
発行: 金沢大学 大学教育開発・支援センター  
URL: [http://www.kanazawa-u.ac.jp/faculty/daikyou\\_rche/index.htm](http://www.kanazawa-u.ac.jp/faculty/daikyou_rche/index.htm)

## 共同学習会のご案内

### 第173回共同学習会

日時: 2008年1月24日(木) 16:30 - 18:00

会場: 角間キャンパス総合教育棟2階大会議室

テーマ: GPA制度の運用と課題 FD研究・実践開発シリーズ第6回

発表者: 渡辺 達雄(大学教育開発・支援センター)

趣旨: 周知のように、大学設置基準で厳格な成績評価が義務付けられており、本学においても4月から全ての学士課程でのGPA導入が決まっているが、運用方法、また制度を活かすための関連の(教育支援)システム作りにあって解決しなければならない課題が多いと予想される。学習会では、同志社大学などいくつか他大学の事例を取り上げ、そこから得られる示唆をもとに、皆さんと一緒に考えていきたい。

### 第174回共同学習会

日時: 1月31日(木) 16:30 ~ 18:00

会場: 角間キャンパス総合教育棟南棟2階大会議室

発表者: 吉川弘明、足立由美(保健管理センター)、青野透(大学教育開発・支援センター)

テーマ: コミュニケーションプレイスについて - 学生支援GPシリーズ第一回 -

内容: 学生の居場所作りは、多くの大学が共通に抱える課題である。とりわけ初年次教育の充実のためには、カリキュラムや授業内容・方法の改善と並行して、学内における学習あるいは交流の場の確保が必要となる。本学の中期計画も、教育研究等の質の向上の項目で「学生への支援に関する目標」として「学生交流スペースの確保について検討する」ことを明記している。こうした背景から、本学が文部科学省により選定された学生支援GP(詳細は保健管理センターHPに掲載)においては、コミュニケーションプレイスを創ることが主要な取り組みの一つとされた。今回の共同学習会では、学生支援GPに関する報告、および、今年度実施した『学習環境改善のための1年生・2年生アンケート』の分析結果紹介の後、学生部や施設管理部の職員の方々さらには学生諸君にも参加していただき、実現に向けた具体的な構想について議論したい。(なお、青野を研究代表者とする科学研究費補助金を得ての研究「大学評価指標における『学生支援』の位置づけに関する実証的研究」の成果報告の一部をなすものである。)

## 第5回大学教育セミナー開催のお知らせ

学生支援力の向上が教育効果を高めるための前提条件であることはすでに共通認識となっています。今回の全学FDでは、他大学の事例も踏まえ、効果的な学生支援について考えます。多くの教職員・学生の方々のご参加を期待します。

主催 金沢大学大学教育開発・支援センター

日時 2008年2月3日(日)(13時受付開始) 13時30分 ~ 17時40分

場所 金沢大学サテライト・プラザ(金沢市西町教育研修館内)

テーマ 学生支援をどう評価するか - 今、大学教育に問われているもの -

開会挨拶 鹿野 勝彦(教育担当理事)

趣旨説明 堀井 祐介(大学教育開発・支援センター准教授)

第一部 講演 13時40分 ~ 15時20分

講演1 河田 悌一（関西大学学長）

「学生支援はどうあるべきか - 関西大学現代 GP の事例を踏まえて - 」

講演2 藤川 麗（駒沢女子大学専任講師、カウンセラー）

「学生相談の ” 成果 ” を捉え直す - コラボレーションによる評価の可能性 - 」

第二部 シンポジウム 15時30分～17時30分

報告1 青野 透（大学教育開発・支援センター教授） 「学生支援と認証評価」

報告2 吉川 弘明（保健管理センター教授） 「金沢大学の学生支援 GP について」

指定発言 小島 佐恵子（北里大学高等教育開発センター専任講師）

討論

閉会挨拶 早田 幸政（大学教育開発・支援センター教授）

終了後 情報交換会（18時30分～20時）金沢スカイホテル（武蔵が辻交差点近く）

**【参加申込み】** 当日の参加も歓迎しますが、準備の都合もあり、可能な限り以下の要領での申し込みをお願いします。

（1）必要記入項目：氏名、所属、連絡先、情報交換会参加の有無

（2）参加費：無料。なお、情報交換会費3000円は当日セミナー受付にていただきます。

（3）事前申し込み締め切り：2008年1月21日（月）

申し込み先 [info-rche@ge.kanazawa-u.ac.jp](mailto:info-rche@ge.kanazawa-u.ac.jp) または FAX 076-234-4172

## 教育学部FD - 研究授業・チームティーチングの試み -

12月18日、教育学部において第7回教員養成改革フォーラムが開催された。中学校理科の「理科教育法A」の授業参観と授業後に参加者による授業検討会が行われた。この研究授業では、教科教育の松原道男先生と教科専門（地学）の酒寄淳史先生との共同担当という新しい授業形態が提示され、そのねらいは、従来分断していた教科教育と教科専門とが授業設計においていかに実効的に協働できるかを探るものである。学習者の認知プロセスへの配慮と専門分野の論理の厳密性とをいかに折り合いをつけて授業を組み立てるかという問題は、教育学部の授業に限らず、すべての大学教員が日々向き合っている課題である。

筆者は、学外のカリキュラムやFD関連のセミナー等での情報収集を行っているが、おそらく多くの教員の興味を中心とする授業の中身、授業設計の事例を知る機会は少ない。本学教育学部のFDの取組は、学部、大学院のFDが義務化された今、次世代のFDの一つのモデルを示している。教員の興味は自分自身の授業で、いかにして正確な知識や論理の流れを学生を引きつけながら伝えるか、考えさせるかである。学生を引きつけられずに進める授業で苦しいのは教員自身である。したがって、教員の自律的なFDが望めるのは専門分野ごとの授業設計に関わることを考えられる。教育学部のような教科教育の専門家との議論は恒常的には難しいが、分野ごとに何をどう教えるかについて見解を出し合って議論し、自分の授業にフィードバックさせることは多くの教員が望むところであろう。

今回の研究授業において、教科教育と教科専門の協働、接点を探るといった論点はきわめて明確であった。2年後期の「理科教育法A」の1週が今回の研究授業として公開された。中学校第1学年第2分野の「大地の変化」について、火山、地層、地震などの単元構成、つまりこれらの内容をどのような順番で授業を行っていくかについて学生に考えさせるものであった。学習事項をどの順番にいかなるつながりをもって授業を構成するかは、中学校の授業でも大学の授業でも教員が設計を行う上でまず行うことである。受講生は3年前期の教育実習を控え、真剣に自分自身の考えとその根拠を発表していた。学習事項を授業全体でいかに配置するかについて、教科教育と教科専門の2つの立場から学生の案に対して意見が述べられた。導入部での学習者の興味関心を引きつける工夫と学習内容の専門性・論理性との折り合いについての議論などが行われた。事前に参観者に配布された資料に述べられている通り、「教師がどのような観点を強調して単元構成を行うといった、その教師の教育観で単元構成が異なることを体験させる。そのことにより、意味なく教科書の順番で教えればよいというのではなく、これまでに学習した明確な教育的観点や教育観をもって授業計画を立てることの大切さを実感させることを目的とする。」受講生には2つの立場から様々な意見が述べられた。

今回、教育学部の新しい授業形態を知るとともに、今後の大学教員のFDの具体的なモデルについて考えることができた大変有意義なフォーラムであった。（文責 大学教育研究開発部門 西山宣昭）